

編集後記

朝日新聞7月19日朝刊の1面から2面にかけて「弁護士になったけど」、「もがく『法曹の卵』」、「お金、もうないよ」、「夢追うより食いぶち」、「法科大学院乱立の末」といった見出しの記事が掲載されている。内容は、弁護士になったものの年収が300万～400万で経費を差し引くと半分程度しか残らない30代男性の話、長年勤めた病院事務の仕事を辞めて法科大学院に入ったが、2度目の不合格になった55歳男性の話、「三振」して就職活動を始めた31歳男性の話等々である。私も、あまり思い出したくないが、旧司法試験受験の経験がある。当時から悲惨な話には事欠かない世界であったが、今はその悲惨さが倍加しているようである。原因は、上の見出しにもあるように法科大学院の乱立にあらう。記事には「大学別のデータを見ると『二極化』の傾向もみえる」とも書かれている。すでに姫路獨協大学法科大学院が学生募集停止に追い込まれており、全体の真ん中位まで盛り返してきた本学法科大学院もうかうかしてはいられない。今年度の入試あたりが分水嶺になるのであろうか。

(事務局長 田邊宏康)